

青

夢

丹羽文雄著

青 麥

丹 羽 文 雄

文藝春秋新社

青 麥

昭和三十年七月十日 印刷
昭和三十年七月二十日 發行

定價 一六〇圓
地方賣價 一七〇圓

著作者

丹^に羽^わ文^{ふみ}雄^お

發行者

車^{くるま}谷^や弘^{ひろ}

印刷者

曾^{そう}根^{こん}盛^{せい}事^じ

發行所

文藝春秋新社

東京都中央區銀座西五ノ五
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁亂丁の際は、お買求の書店
又は發行所にてお取換致します

印刷・扶桑印刷
カパー・求龍堂
銀本・牛込加藤

青

麥

壹

二階建の山門に、梯子がたてかけてあつた。十五米のながさだが、二本梯子がつぎ足されて、ほとんど垂直にちかい形に立つてゐた。まん中のところが、ゆらりゆらりと揺れてゐた。ゆれ方はとまらない。上下する人間にはらをたててゐるやうに、梯子は感情的にゆれてゐた。上つたり下つたりする最中には、梯子は神経質になるらしい。油斷のならない梯子の正體であつた。大人は慎重に、梯子の正體をなだめすかして、ずるく上つたり下りたりした。

鈴鹿は、梯子のまん中どころにしがみついた。それ以上は上ることもできず、下りることもできなかつた。ゆれ方ははげしかつた。梯子の正體におびえて、降参したかれは、ひたすら梯子のきげんのなほるのを待つよりほかはなかつた。あるひは、十歳の鈴鹿が大人のまねをして登りはじめたことに梯子はきげんを害ねてしまったのかも知れない。鈴鹿は絶望のなかにおちた。からだは宙に浮いてゐた。しつかりとにぎつてゐる梯子の兩うでは、決して味方ではなかつた。弟子の足もとよ、日月から軍里こ、ころ、同則を言でハこしご参直こ受てらこ。令也

は息をするのさへ、はばまれた。死んだやうにじつとしてゐた。うち負かされて、恐縮してしまつた鈴鹿をみて、梯子の正體は徐々にきげんをなほしていくやうに感じられた。が、かれはまだ不安と絶望と恐怖のなかに、とりのこされてゐた。かれは、そつと目をあげた。目をあげることにすら、ぬすみをするやうであつた。かれは、いそいで目をつむつた。白い雲が、いきほひよく走つてゐた。雲は山門の屋根とすれすれのところから、庫裡をめがけてはしつてゐた。わが身が宙に浮いてしまふと、高低の感覚がなくなるのだらうか。とちた目のなかに、秋空の青さがしみついてゐた。鈴鹿は梯子にほほをつけて、再び目をあげた。空の青さを見ない方がよかつた。青の世界は、氣がとほくなるほどに深く澄んでゐた。

鈴鹿は瞬間、あたりが一切の物音をやめてしまつたと感じた。それまでは、屋根の上で、瓦屋と父親のはなし聲がきこえてゐた。瓦のはしを割る音が、きこえてゐた。かれは次の一瞬、自分がいよいよ梯子から落ちていく順番のやうに錯覺した。目の下には、佛法寺の境内がひろがつてゐた。境内は、静まりかへつてゐた。足うらや、掌に自信がなくなつた。すると、あたまたの上に落ちてくるものがあつた。大粒の雨のやうであつた。雨にしては、大小まばらであり、べつとりとして重味があつた。かれは首すぢに落ちたものを、片手でたしかめるといふ餘裕をもてなかつた。それでは、梯子がぐらりと揺れることになる。大粒の雨のやうなものが、雨よりももつと量があるものが、つづけさまに落ちてきた。その一つが、梯子のうでをつかんでゐ

る手首に落ちた。粘土であつた。瓦の下にぬりつける土であつた。瓦屋が瓦といつしよに屋根にはこびあげた土であつた。落ちてくる土は、參道に落ちると、叩きつけられたやうに平たくひろがつた。すでに參道には、點々と粘土の死骸があつた。たたきつけられて、ひしやげて、そこらの土とはちがふ生々しい色であつた。

またつづいて、粘土が落ちてきた。ぬれてゐる粘土が密着力をうしなひ、大部分の仲間からはなれて、ひとりでにながれ落ちてくるといふ風でなく、人間がわざと落してゐるやうに大量であつた。鈴鹿はあたまと肩に、粘土の雨をかむつた。異様な落ち方であつた。かれはおそろおそろかほを舉げた。屋上の人間に、注意をあたへるつもりであつた。そのとき、かなり大きなトかたまりの粘土が屋根をはなれて落ちかかつた。そのまへに、いくら乾いたこまかい土の雨が殺氣だつて落ちてきた。落ちてくるのを眞下からながめてゐると、避けやうがなかつた。土のかたまりが、水平になつて落ちてくる。ガラス板に土のかたまりをのせて、水平にふはりと落すやうにみえた。屋根のはしに、むしろがあらはれた。むしろは擴がつたまま、屋根の勾配をすべり落ちて、ひらいたままで落ちてきた。ふはりと落ちてきた。鈴鹿は梯子にしがみついて、ながめてゐた。ひらいたままのむしろは、やがて鈴鹿の目のまへをとほつた。むしろの上に、黒いかたまりがうづくまつてゐた。聲もたてず、あがきもみせず、自然の落下の法則にしたがつてゐた。參道のまん中に落ちた音を、鈴鹿はきかなかつた。そこにむしろをしき、

人間がうづくまつて乗つてゐるやうな結果になつた。屋根から落ちた人間のうめき聲をかれはきかなかつた。かれはおどろきのあまり自分がいまこはい梯子の中ほどにのぼつてゐることを忘れた。落ちた人間が、父親の如哉であると氣がついたのは、しばらく経つてからであつた。

叫び聲が、山門の屋根から發せられた。人々が駈けつけた。庫裡から義母の絹がはしりでてくるのをみて、鈴鹿は一段づつ、用心ぶかく梯子をおりた。どさくさにまぎれて、梯子のぼりを發見されないで濟みさうであつた。地上から二三段のところにおりた。もう大丈夫であつた。「ご院さんが、むしろに足をかけられたんや。細い縄で、落ちんやうにおさへてあつたむしろに、足をかけられたんで、縄がきれた」

梯子が大ゆれにゆれたが、鈴鹿はすでに梯子の恐怖から解放されてゐた。瓦屋が梯子のまん中のところで大膽にゆられて御院主の不注意を人々に説明をした。責任からのがれようとした。梯子をすこしもおそれてゐない瓦屋を鈴鹿は見あげた。

戸板にのせられて、如哉は山門を出ていつた。如哉はうなつてゐた。戸板をかついだ檀徒の世話方や、つきそひの世話方は黙々としてあるいた。佛法寺の住職ともあらうものが、瓦屋の仕事ぶりを見物に、自分も瓦屋同様に屋根の上で身輕にふるまはうとしたことが、輕率であつたと咎めだてしたところで、どうにもならなかつた。人々はあきらめてゐた。はじめて人生の舞臺にひきだされたやうに鈴鹿は、この椿事をどう判斷してよいかわからなかつた。今までの

経験とは似もつかない、あたらしい體驗であつた。かれの心は、興奮にふるへてゐた。いきなりかほをなぐりつけられたやうな打撃であつたが、それが今後どう發展をするのかわからなかつた。かれは父の死を豫感しなかつた。墜落と死をむすびつけるほど、かれの心は敏捷に、的確にうごきだしてゐなかつた。

その日は、たちまち夜になつた。秋の日が短いといふのではなかつた。義母は病院にいつた。ひろい庫裡は、静まりかへつてゐた。留守番に、女人講のおまき婆さんがやつてきた。おまき婆さんは、足おとをたてずに土間をあるいた。一斗釜が三つ出ならぶ黒いタイル張りの窯のまへに、おまき婆さんはしやがみこんで、薪をくべてゐた。鈴鹿はどこにゐたらよいのか。土間をあるいたり、世話方のたまりの間の十八疊敷の部屋にすわつてみたりするが、心ぼそいだけであつた。窯の火が、おまき婆さんの背後の壁にうつつてゐた。おまき婆さんのかほが、赤くぬつたやうにみえた。婆さんといふのは氣のどくであり、五十歳まへであつた。農家の妻女だが、田圃には出ることはなくて、せいぜいうちのまへの畑に出るくらゐである。つるりとした白い大柄なかほ立ち、ととのつてゐた。若いころの美貌は、まだ目もとに十分のこつてゐた。「坊ちゃん、おみ堂のおつとめはすんだかな」おまき婆さんが窯のまへから、中腰になつて聲をかけた。

「お内佛ならええけど、おみ堂はこはい」

「それでもご院さんのかはりに、たれかおまゐりをせんと、あかんでな」

本堂は戸じまりもしてなかつた。すでに夜の闇のなかにとちこめられてゐた。親鸞と阿彌陀如來の厨子も、扉をしめてなかつた。勝手知つたる本堂とはいへ、まつくらがりのなかにはいつていく勇氣は、かれになかつた。闇をおそれてゐることを、おまき婆さんがみとめてくれさうにないことが、はら立たしかつた。本堂には、小さい電燈が二つともるやうになつてゐた。本堂に通じる下廊下しものはしに、スキツチがあつた。うすくらい灯が本堂につくりだす陰翳は、いつそう不氣味であつた。金箔のはげおちた太い柱、おくぶかい厨子、線香のけむりでくろずんでしまつた内陣の天井、作者不明の古い佛像の陰翳、輪燈、蠟燭立、花立のどぎつい影、ひつそりとした經机、ことに後門からはいつていく内陣裏手は、暗闇が凝結してゐた。そこは晝間でも、くらい廊下であつた。わが家でありながら、鈴鹿はふだんから、できるだけそこにははいらないことにしてゐた。餘儀なくとほるときには、駢足になつた。濕つた闇がよどんでゐた。陽の目をみたことのない病人の肌を聯想させた。しかも、この廊下は壁をへだてて墓地に接してゐた。くら闇にしめつた冷たさをおぼえるのも、あるひは科學的に説明ができるかも知れない。鈴鹿を氣味わるがらせる理由には、いま一つあつた。廊下のはしには六疊の疊じきの部屋があり、そこには葬式につかふ道具がしまはれてゐた。火葬場まではこばない造花や、棺桶をのせる四つ手の臺などがしまはれてゐた。

おまき婆さんが、本堂に出向いた。鈴鹿は庫裡から下廊下^{しも}にわたる柱のかげから、うかがつた。おまき婆さんは電燈をつけたひろい本堂に、とりのこされたやうに、つくねんとすわつて、合掌をしてゐた。聲はきこえなかつた。かれは、自分がまだまだ子供であることを感じた。おまき婆さんは、おそれてゐない。鈴鹿より勇氣のあることを、誇示してゐなかつた。やがて、おまき婆さんは内陣に上つて厨子をしめた。僧籍にない人間は、むやみと内陣に上つてはいけないことにされてゐた。まして厨子に手をかけるなど、もつてのほかであつた。おまき婆さんは、このおそろしさを申譯するやうに、念佛をとなへづめであつた。今夜は、特別であつた。住職が屋根から落ちたのである。おまき婆さんは、雨戸や、大扉をしめてあるいた。

義母は、その夜かへらなかつた。

毎朝、鈴鹿は眞鍮の高坏のふれあふ音で目をさました。御佛飯^{ごはんさん}を、父が本堂にはこぶ音であつた。早おきの父親は、山門をあけ、本堂の扉をあけ、家中の雨戸をあけた。そのあひだに、義母がごはんをたき、御佛飯をつくつた。すこし深目の茶のみ茶碗にごはんをいれて、小さい眞鍮の高坏にさかさに伏せると、飯の山ができた。それが、九個あつた。三個は、御内佛にそなへるのであるが、六個の中にも、大小の區別があつた。いちばん大きな眞鍮の臺は、阿彌陀如來にそなへる。次の大きいのは、親鸞と眞慧の畫像にそなへ、あとの畫佛や、歸命盡十方と無碍光如來の二本の軸には、小さい御佛飯がそなへられた。六個の御佛飯を木箱に入れて、本

堂にはこぶとき、眞鍮と眞鍮の佛飯臺がふれあつて鳴つた。何十年もつかひ古した木箱は、骨董品のやうになつてゐた。眞宗高田派では、勤式後はすぐさげることになつてゐた。

目をさました鈴鹿は、かほをあらひに土間をわたりながら、たれもゐないのに氣がついた。眞鍮の佛飯臺を鳴らしたのが、おまき婆さんであることに氣がついた。かれは、ひとりで朝食をすませた。父のことが、心配になつた。が、本堂からもどつてくるおまき婆さんにそれをたしかめることがこはくて、學校へいつた。

父の墜落は、教員室にも知れわたつてゐた。

學校からもどると、町内の檀家の一軒で、祥月命日が待つてゐた。月に二回、鈴鹿は墨染の法衣をきて、經文をかかへて、檀家まゐりをしなけりばならなかつた。いやだつた。が、如哉にさからふことはゆるされなかつた。かれは、學校の友だちに會はない道をえらんで、檀家にいつた。佛壇には、いつもあたらしい花と火をつけるばかりに蠟燭が立つてゐた。かれの法衣には、うんと縫上げがしてあつた。が、袖とゆきは大人の寸法のままなので、大きな袂をもてあました。かれは法衣の袖をいく重にもたくしあげて、蠟燭をともし、線香をたいた。かれに讀めるのは、簡単な經文であつた。阿彌陀經をはじめによんだ。ありがたさうに讀むといふ藝當は、かれにはできなかつた。それでも鈴鹿は、立派に僧籍をもつてゐた。身分堂班は、權中僧都といふ。眞宗高田派の僧階の中では十番目にあたり、下から六番目であつた。大學卒業者

で、佛敎學專攻者にはじめてあたへられる僧階であつたが、かれは八歳のときに坊主となる得度式をうけ、その時にもらつた。寺格でもらつたものであり、さらに本山に必要以上の金を上げたといふ情實の結果であつた。檀家のお婆さんが、鈴鹿のうしろにすわつてゐた。

「如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園……」

お經よみのお經知らずであることを、鈴鹿は反省をしなかつた。自分は子供だからわからないのだと、あたまごなしにきめてゐた。どのことばも、ありがたい意味をもつてゐるのだらうと想像してゐたが、「摩訶目犍連、摩訶迦葉、摩訶迦旃延、摩訶俱絺羅、離婆多、周利槃陀伽、難陀、阿難陀、羅睺羅、憍梵波提、賓頭盧頗羅墮……」これがみな固有名詞であり、佛の諸大弟子の名前だとわかれば、どう感じたらうか。それが終ると「文類」をよんだ。かれは、本から目をはなすわけにかなかつた。が、うしろで合唱するお婆さんは暗誦した。暗記をしてゐなくて、かれは恥しかつた。檀徒は「文類」や「和讃」を暗記してゐた。かれは、ためされてゐるやうであつた。將來佛法寺の住職となるかれは、寛大な檀徒のおもひやりから、その修業を、稽古をさせてもらつてゐた。

最後に「御書」なるものを讀んだ。これは、露骨にあたまの下るやうに、ありがたい調子でよまねばならなかつた。

背後の檀徒は、上半身を折りまげた。ありがたい御書に對して、習慣的にふるまつた。法味

愛樂^{あいげう}にひたるための準備であつた。鈴鹿は教室で讀本をよむのとあまりちがはない調子で、よみはじめた。

「そもそも祖師聖人法義の趣は、世間には王法をうやまひ、公方をあがめ、國主地頭の法度をまもり、公役所當^{くやくじやう}つぶさに沙汰をいたし、主君に忠節をなし父母に孝行をつくすべし。出世の法には、諸佛菩薩並に諸神等をもかろしめず他宗他門を誹謗せしむることなかれ。云々」

王法といひ、公方、國主地頭といふものが、鈴鹿にはぴんと來なかつた。これをよむたびに鈴鹿は、檀徒といふものは、いたるところであたまを下げなければならぬのだと感じた。忍耐と勤勉だけを、檀徒はもとめられてゐた。高田派本山專修寺のある時代の宗主であつた大僧正堯秀のつくつたものであるといふことを、知らなかつた。忍耐や勤勉のなかのごまかしには氣がつかず、かれに必要なことは、あやまちなく讀むことであつた。終ると、そそくさと經文をふろしきにしまつた。佛壇をうしろにしてすわりなほすと、丸盆の上に、白紙につつんだお布施がのつてゐた。中身はたいてい、三十錢であつた。一度しまつたふろしきをあけて、かれはお布施を經文の上に重ねて、つつみなほす。すなほな氣もちになれなかつた。一種の恥しさを感じた。ほどこされてゐるといふ屈辱感であつた。別のお盆には餅菓子が出された。檀徒は氣をきかせて、かれのまへで菓子を白紙につつんで渡した。すると、鈴鹿は子供に還つた。大人の仕事を無事につとめて、その努力をほめられた子供の感情になつた。金錢よりも菓子を

らふ方が、ふさはしかつた。あるとき、お婆さんが菓子をつつんで渡すのをわすれてゐた。鈴鹿は氣のつかぬふりをして、土間におりた。あわててお婆さんがつつんで差しだした。自分の手で菓子をつつんで、ふろしきにしまふまでの精神にはなれなかつた。さうしてもよかつたのである。檀徒の手間がはぶけることであつた。

「暗うならん内に、おみ堂のおつとめをしておくとええな、坊ちゃん」

と、おまき婆さんが檀徒まゐりからかへつてきた鈴鹿をむかへて言つた。ぼつちやんといふのでなく、ぼうちやんと發音をした。鈴鹿はたれにも、さう呼ばれた。坊ちゃんの意味と、坊主の意味がいつしよになつてゐた。この呼び方が、かれには氣にいらなかつた。この呼び方をされると、蠟燭がとけて流れて、まつたく別のかたまりに變つてしまふやうに自分の運命がのぞまない形に變へられる氣がした。反抗的に、佛間にはいつて、法衣をぬぎはじめた。八疊の佛間であり、一方に御内佛の佛壇がはめこまれてゐて、反對側には法衣をかける衣桁があつた。この部屋には、電燈がなかつた。すると突然、自分がいまこの寺の主人であり、父は病院にゐる、義母ももどつてはゐないのだ、本堂の勤式を一日も缺かすわけにはいかないといふ責任を感じた。かれは、本堂に向向いた。下廊下から本堂に上るには、二段の階段があつた。元氣よく上つた。かれはおそれないで、たれもゐない本堂にはいつていつた。かれは、どこでも通用する、ひとかどの大人になつた氣がした。西陽が、障子にあたつてゐた。かれは餘間をななめ

にあるいて、内陣にはいつた。そこから幅二尺ほどの後門をぬけた。阿彌陀佛のうち側の眞下が、押入になつてゐて、そこに蠟燭や燭臺や線香がしまはれてゐた。鈴鹿はしやがみこんで、蠟燭臺をともした。線香を何本か、いいかげんにひきぬいて、火をつけると、後門を出たすぐの親鸞の厨子をかざる輪燈に火をつけた。線香をたて、蠟燭に火をつけた。餘間にも二本の高い燭臺があり、白い皿には油がとりとたまつてゐた。燈明のしんが、いまにもあぶらのなかに引きこまれさうに、小さく皿のはしにあたまを出してゐる。それに火をつけるには、努力がいつた。蠟燭が四本、燭臺の燈明が六つ、輪燈が四つあつた。かれは時間に制限されてゐるやうにあるいた。どれ一つをはぶいてもならなかつた。はぶいたところで、たれも見てゐるものはなし、佛も聲をだすわけはなかつたが、かれはしじゆう見守られてゐるひとのやうにふるまつた。この感じは、絶對であつた。本堂にはいると、いつもこののがれることのできない凝視の感じをうけた。ひとがゐるときには、なほのことであつた。鈴鹿はいひつかつてゐることを、最小限度にやつてのける子供のやうに、餘裕もなく、阿彌陀佛とまむかひにすわつた。經机がある。阿彌陀經の第一頁をひらいた。それから數珠を兩手にかけて、あたまを下げた。阿彌陀佛のかほを仰ぎ見なかつた。こはいのだ。金泥のあたらしい、あかるい厨子のなかに、すすけて黒くなつた佛が立つてゐた。佛の目は、おそろしい光りをもつてゐた。人々のねがひと、あこがれと、いのりが凝集して、この世のひととも思はれない溫和ななかにもきびしさをたたへ